

初恋のこと

長 嶋 安 男

上鷲宮五丁目

昭和十九年から二〇年にかけて、敗戦の色濃い時代から、日本国民のほとんどが苦しんだ食糧難の戦後にかけての時代であった。

わたしは勤労働員の中学生として、都下立川市の飛行機工場に働いていた。いまでいえば高校一年生から二年生にかけての年齢である。ここで一人の異性A・Nさんと出会う。

この時代は、若者に教室で勉強する時間すら与えない時代であった。でも、このことは、かえってわたしたち中学生に勉強を渴望させる方向にむけていったように思う。昼休みのわずかな時間などにも、工場の片隅で数学の問題を解き合ったり、英語の辞書を引いたり、文庫本を読み耽ったりしている中学生の姿があらちらに見られたものである。

わたしも、そのころから興味を持ち始めていた万葉集の和歌の勉強をやっていた。もう、入手しにくくなって資料を捜し出してきては、一首一首その意味や時代背景を探り、中学生

なりのノート作りをしていたのだった。学窓から遠く引き離されてしまっていた中学生には、こんなことだけが楽しみだったように回想する。

A・Nさんは、わたしたちと同様、同じ工場に女子挺身隊員として動員されて来ていた一つ歳上の女性であった。彼女の仕事場は、わたしの仕事場のすぐ隣で、仕事の関係から、いつしか自然と話をするようになっていた。そんなある日の昼休み、ふっとわたしの傍らに立ったA・Nさんは、私のノート作りをのぞき込みながら興味を持ったのか、万葉集についてのいくつかの質問をした。

そのとき、わたしがどんな返事をしたのか、いまは遠いむかしのことと残念ながら記憶にない。ただ、このことがきっかけとなって、A・Nさんとわたしは、毎日の昼休み、万葉集の勉強と一緒にするようになっていた。わたしは、家に帰ってから暗い電灯の下で熱心に下調べをし、翌日は一生懸命になってA・Nさんに説明した。懐しい思い出である。毎日昼休みの時

間が来るのが待ち遠しかった。

二〇年五月、軍国少年であったわたしは、海軍を志願して工場を去ることになった。すでに二人の兄は軍隊にとられ、家には男手はもうなかったのに……である。

入隊の前日、A・Nさんは、わたしが貸していた歌集を新聞紙（当時は、綺麗な包装紙などなかったのである）に包んで返してくれた。家に帰って何気なく包みを解くと、歌集に挟んで、優に便箋十枚は越すA・Nさんからの手紙が出てきた。そこには、「軍隊だけは行ってほしくなかった……」「あなたには、ただほかにも国に尽くす道はあったはず……」「もっと万葉集の勉強と一緒に続けたかった……」等々、書かれてあった。しかし、内容よりなにより、A・Nさんからの手紙は、わたしにとって、初めて異性からもらった手紙だった。

貧^{むさぼ}るように読んだ。そして読み進んでいくうち、鈍いわたしも「ハッ」とする。気づいてみれば私の心の中にも、それまでは意識していなかっただけで、A・Nさんへの思慕がいまさらのように胸一杯に広がっていくのに自分でも驚いたのを憶えている。

八月十五日敗戦。本土にいたこともあって、八月末には復員できた。入隊のときはまだ建っていた東海道線の沿線の工場は、一つとしてその姿はなかった。ようやく辿り着いた東京駅のホームの屋根は完全に焼け落ちていた。降り立った中野駅のホー

ムからは青梅街道まで見通せた。

人々の心は荒^{すさ}みがちだった。しかし、わたしの心の中には、いつもA・Nさんとの懐かしく楽しい思い出があって、それが荒^{すさ}みがちな心の支えとなってくれた。

人生でもっとも大切なことの一つは、いつ、誰と出会ったか、そして、そのことで自分をどれだけ変えられたかであると聞く。わたしにとってA・Nさんとの出会いは、少年から青年への脱皮をもたらししてくれたものと、いまは深く感謝している。異性を思慕する心をわたしの心の中に醸成させてくれた、A・Nさんへの感謝は生涯忘れないと思う。そして、この感謝が万葉集と一緒に学んだという体験の中で育ったことを想うとき、今の時代でも、中学生、高校生に豊かな人生体験のできる『場』を整えるのが、大切な大人の仕事ではないかと考えている。